

奈良時代の人形

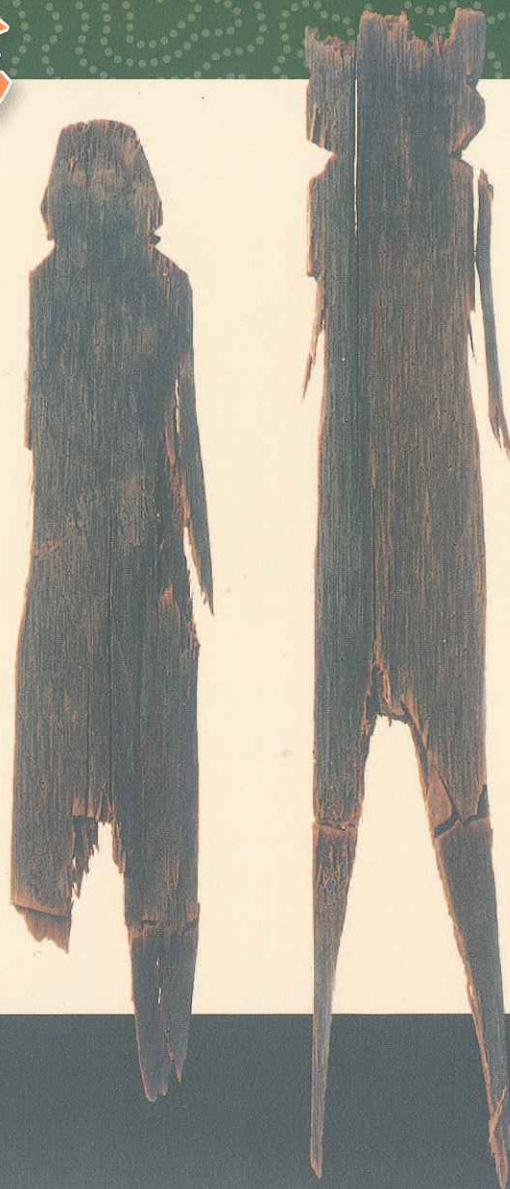
手原遺跡 Tehara

人形は奈良時代（8世紀）の井戸から出土した壺の中に納められた状態で見つかりました。2体あった人形はほぼ同じ大きさで、長さ約16cm、幅2.4cm、厚さ4mmの薄い杉材で作られています。首にV字形の切欠きを入れて頭と肩を区別し、切込みで両腕をあらわし、股は深いコ字形の切り込みを入れて折り取り足を作っています。

写真では見えにくいのですが、墨で眉目鼻口、あごひげ、頭の被り物を描写しています。

薄板の人形は、大陸文化の影響を受け7世紀後半に出現し、奈良・平安時代に盛んに使用されます。病気等の原因である罪穢れを人形に移し、水に流すのが一般的な使われ方で、宮中で行われる大祓のような国家的祭祀から、個人的な祭祀にも使われたようです。

栗東市内でも下鉤遺跡の河川跡から平安時代の人形が2体出土しています。今回見つかった手原遺跡の人形は、壺に入れて井戸に落とされた事を考えると病気等の災いを封じ込めようとする意図があったのでしょうか。



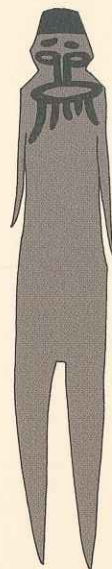
◀ 人形 ほぼ実物大



▲ 壺と人形 壺は須恵器の細頸壺で、頸部を故意に打ち欠いています。



暗いよ、狭いよ……



▲ 2基並んで見つかった奈良時代の井戸、左の井戸から人形が出土しました。

手原遺跡は、J R 草津線手原駅周辺に広がる遺跡です。栗東市を含む野洲川下流の平野部には、平安時代に整備された栗太郡主条里地割が広く遺存しますが、手原駅周辺には奈良時代以前の正東西南北地割が残り、古瓦が採集されることから古代寺院の存在が指摘されていました。

近年、区画整理事業や工業団地造成により発掘調査が進められ、白鳳時代の瓦が多数出土する遺跡西域が古代寺院で、墨書土器や木簡などの文字資料が出土し、規模の大きな建物が発見される遺跡東側が官衙（役所）であったことが次第に明らかになってきました。今回人形を発見した井戸は、遺跡の北西端で発掘されました。



▲ 井戸から出土した様々な遺物。左下は馬歯にキノコ類。